

テーマ：熊本市動植物園の歴史とこれからの動物展示について

○開園

- ・ 熊本市動植物園は上野、京都、大阪、甲府、小諸に次いで、現存する動物園では日本で6番目に古い動物園として、昭和4(1929)年7月26日に水前寺成就園の東側9332.4㎡の敷地に、「熊本動物園」として開園。84年の歴史をもっている。
- ・ 開園当日は午前9時から来賓多数が出席して盛大な開園式が行われ、午後1時から一般観覧が開始され、絶大な人気で連日入園者が詰め掛けた。
- ・ なかでもインド象の飼育展示は日本で初めてということで、人気があった。
- ・ 当時のエピソードとして、開園1年後の昭和5年6月にニシキヘビが逃げ出し、新聞で連日報道され、大騒ぎとなった。ヘビは隣の畑に逃げたと思い捜索したが見つからず、翌月になって少女が「おサル小屋に大蛇が！」と教えてくれてわかった。お詫びに市は動物園の入園料と市電、市バス代を3日間割引とした。
- ・ 実は当時、動物園は交通局が所管していた。日本の動物園の設置主体としては、公立の動物園と電鉄資本が遊園地型動物園を開設するという、大きく二つの流れがある。
- ・ 熊本市の場合も公立ではあるが、市電の収入増をひとつの目的として開設された。

○戦時中

- ・ 昭和18年、空襲による動物の脱出を防ぐために猛獣類を処分せよとの命令が下り、動物たちが電殺されるという悲惨な出来事があった。このときの詳細な飼育日誌は現在も園長室に保管されている。
- ・ 昭和20年3月、一時閉園。

○再開園

- ・ 昭和22年3月の市会で動物園は当分復旧の見込みがないため、廃止について議論されたが、6月に存続再開が決まり、8月再開することとなった。
- ・ 市では動物園復活を祝い、納涼大会を50日間、沢山の芸能人を呼んで開催。このイベントは終戦以来娯楽に飢えていた市民に大変喜ばれ、連日、入園者の列が水前寺入り口まで長蛇の列をつくった。
- ・ その後、施設の拡充など整備を進め、昭和29年度までは入園者も増えていった。そして、昭和29年には開園25周年を記念し、動物を連れて下通りをパレードした。

○現在の場所に移転

- ・ 昭和34年頃から移転話が持ち上がっていた。昭和36年には議会でも移転について取り上げられている。
- ・ 移転理由は、敷地が手狭で入園者が1000人を超すと満杯になる状況で、住宅が立て込み拡張も出来ないこと。動物の運動不足などの問題、また、時代背景として、動物園に対してレジャー施設的な要素を要求され始めるようになり、新しい施設を整備する必要性があったことなどの理由が挙げられている。
- ・ 昭和40年に移転候補地の調査が行われた。移転候補地は熊本城、北岡自然公園、立田山、そして江津湖が候補となり、上野動物園の初代園長古賀忠道氏の推薦もあり、江津湖に決まった。世界の動物園を見てきた古賀氏は「動物園を水辺に作るなら有名になる」と言われた。

- ・ただし、当時の動植物園敷地は現在より約 2.5m低い湿地帯で、造成には苦勞したようである。当時の新聞記事によると、ちょうど同じ昭和 44 年に開業した桜町の交通センターの土と、下江津湖の浚渫土などを運んで埋め立てたと、書かれている。
- ・そして、昭和 44 年 4 月 1 日、現在の江津湖畔で水辺動物園オープン記念「くまもと動物大博覧会」が開催。祝賀飛行でブルーインパルスが飛行した。
- ・同年 7 月「水辺動物園」として開園。
- ・昭和 44 年は、熊本市の市政 80 周年で当時の人口は約 43 万人で、2 ヶ月で 72 万人が入園し、大変な賑わいだった。
- ・平成 3 年、隣接する都市緑化植物園と一体化し「熊本市動植物園」となる。
- ・現在、平成 19 年度から 5 期 10 年の再編整備計画により、リニューアルを行っている。

○10/12 オープンのニホンザルエリアの展示手法について

- ・ニホンザルエリアでは、本格的な生息環境展示に取り組んでいる。
- ・生息環境展示とは、動物の生息環境（森や草原や水辺など）の再現を図ることで、動物本来の行動や習性を発揮させる展示方法のこと。
- ・旭山動物園が人気となっているが、旭山動物園は行動展示という方法をとっている。行動展示とは、簡単に言うと、人工的な環境を積極的に取り入れて動物の行動を発揮させる展示方法のこと。
- ・生息環境展示も行動展示も動物本来の行動や習性を発揮させる展示方法という点では同じだが、人工的なものを積極的に取り入れ、より行動に特化した展示が行動展示、より自然的なもの（植物、岩、疑岩）を取り入れた展示が生息環境展示と呼ばれている。
- ・実は動植物園のニホンザルは、昔、熊本県内の相良村から捕獲してきたサルである。ニホンザルが生息する環境、つまりニホンザルの故郷である相良村の風景を再現することができることから生息環境展示を行っている。
- ・S 42、S 43 年に野生ザルによる農作物等の被害に困っていた相良村が熊本県に駆除を申請し、県の依頼を受けて動物園の職員が捕獲したサルたちで、現在は概ね 3 世代目、もしくは 4 世代目となる。
- ・これまでサル山は、岩山で展示されてきたが、本来ニホンザルは森林性である。
- ・今回の展示では、サルの住む相良村の森を再現し、ニホンザルが木の上で暮らすということを伝えると同時に、相良村の棚田や茶畑、農家の納屋などを再現して、里地に現れ、農作物などを荒らす（いわゆる鳥獣被害）サルの状況も理解できるようにしている。
- ・ニホンザルエリアのモデルとした、相良村四浦の晴山地区ではサル、シカ、イノシシの鳥獣被害から集落を守るために集落が柵に囲まれているという現状がある。
- ・近年の鳥獣被害の増加の原因としては、昔はサルが住む奥山と人が住む里地の間に緩衝地帯となる里山があった。現在は里山がなくなり、奥山と里地が近くなっていることもひとつの原因となっている。
- ・今回、相良村を表現したことは、単にニホンザルの生態を見せるだけではなく、動物園で地域環境を展示したことになる。展示を通しサルと人間との関係のあり方や、生物多様性などについて考えて（何かを感じて）もらえればと考えている。
- ・動物園の機能は、レクリエーション、自然保護、学術研究、社会教育の機能があるとされているが、今後の動物園の展示は社会教育の機能を強化する方向になってくると考えられる。